

特集

子供・若者の体験活動を豊かに！

「子供の最大の仕事は『遊ぶ』ことである。」とよく言われています。遊びについての理論を展開したヨハン・ホイジンガは、人間を「遊ぶ人」（ホモ・ルーデンス）と名付けました。彼は、遊びこそが他の動物と人間を分かち最大の行為であると指摘しています。

新型コロナウイルス感染症の大流行から1年が経過し、新しい生活様式が求められる中で、子供たちが思いのままに身体を動かし、自分の思いを発散する機会が奪われてしまっているのではないかとこの声も聞こえているところです。



今回の特集では、青少年教育の研究者である文教大学准教授の青山鉄兵先生と、地域（江東区）で子供や若者を対象とし、「体験」を重視した社会教育事業を実践している認定NPO法人「夢職人」理事長の岩切準さんをお迎えして、子供や若者たちにとっての「体験活動の重要性」について、お話を伺いました。

■ 自己紹介をお願いします。

【岩切さん】 私は認定NPO法人「夢職人」理事長の岩切と申します。「夢職人」は、平成16年から東京の江東区に事務所を構え、子供や若者に対する社会教育活動を、東京都の東部エリアを中心に行っている団体です。具体的には、自然体験、野外活動、科学・文化・芸術活動、スポーツ・レクリエーション活動、キャリア教育などに取り組んでいます。学校外の子供達が体験から学ぶということを重視した教育活動に取り組んできました。どうぞよろしくお願いいたします。

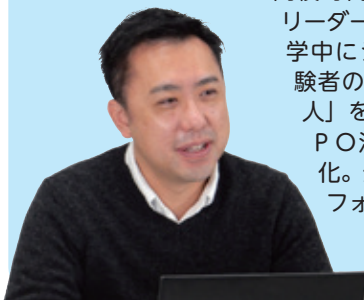
【青山さん】 文教大学の青山です。よろしくお願いいたします。専門は社会教育・生涯学習の分野で、特に子供・若者を対象とした社会教育を専門に研究をしています。また、YMCAに長く関わり、国立青少年教育振興機構でも調査研究を行っています。理論と実践の両方から、体験活動について関わってきました。

■ コロナ禍の下で、子供たちの変化をどのように感じていますか？

【岩切さん】 昨年の3月くらいから、子供たちを取り巻く生活環境が徐々に変化してきて、昨年4月の緊急事態宣言後には、その事態は一変しました。子供たちにとって「五感」を使って遊ぶことがその子の発達にとっていかに重要かについては、広く知られているところですが、その機会が全くと言っていいほど断たれてしまう状況は、これまでになかったのではないかと思います。いろいろな調査を見ても、中高生をはじめ、オンラインでコミュニケーションを取り合うことができる年齢層の子供たちは、自分たちなりに工夫をして、つながりを確保してきました。しかし、

岩切 準さん

認定NPO法人夢職人理事長。
高校時代に江東区でジュニア・リーダー活動に従事し、大学在学中にジュニア・リーダー経験者の有志メンバーと「夢職人」を設立。平成20年にNPO法人として活動を本格化。公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン理事



小学校の中学年以下の子供たちは、家庭の中に閉じこもらざるを得ない状況に陥り、精神的にストレスを感じているように思います。具体的な話では、昨年4月の緊急事態宣言後に公立公園において遊具の使用が禁止されたことなどを受け、「子供は外で遊んではいけない。」という地域の眼差しがより強くなったように思います。

■ 精神的にストレスを感じているという話がありました。子供たちからのSOSのサインは、どのような形で発せられるのでしょうか？

【岩切さん】 閉鎖的な生活を強いられてしまったことにより、子供たちは自分の気持ちを発散する機会が奪われ、些細なことでもキツイ言葉を発するようになったり、物に当たったりすることが多くなったという保護者からの声を聞きます。また、生活時間が乱れたために睡眠に悪影響が出たり、食欲がなくなったという話もあります。

【青山さん】 大学生たちにも、メンタルヘルスにいろいろな課題があることを感じています。今年度はほとんどの大学でオンラインの授業が中心になりましたが、その中で、学生同士がたわいもない雑談をする時間が失われたことが、学生たちのメンタルヘルスに悪影響を与えているように感じる場面が多かったです。また、お互いの行動を監視し合うような雰囲気

が広がっている中で「心の自由度」がどうしても制限されているように感じます。こうした雰囲気をアフターコロナに引きずらないようにしなければなりません。



【岩切さん】 今、青山さんが雑談の話がされましたが、このコロナ禍の状況では「余白のなさ」という問題がクローズアップされたように思います。知識や技術というものは、オ

ンライン化に親和性が高いのですが、これからの時代に求められている「自ら考え、問題を設定し、納得解を導く」という実践的力を身に付けるためには、自由に発想し考えることができる「余白」や「ゆとり」が必要なのです。そういった時間が今回のコロナ禍によって失われているのではないかと感じています。

■ 若者たちに将来に対する「漠然とした不安」が広がっているということでしょうか。

【岩切さん】 若者世代には、今現在に対する不安もありますし、将来に対する漠然とした不安というものがもともと生まれやすいのですが、コロナ禍によって、その不安が増幅されているのではないのでしょうか。社会教育における青少年活動の良さは、皆で集まって話をしながら、お互いに不安感を払拭しながら、三歩進んでは二歩戻ることの繰り返しだと思います。しかし、大学生のオンラインによる就職活動では、評価だけが結論としてやってくる。白か黒しかなく、中間がない。社会教育における青少年活動自体のプロセスに組み込まれている「自分の位置を確認する」という機会がないため、選別されることのみが一人歩きしている。若者が社会に対し自信をもってチャレンジして巣立っていくためのエネルギーを充電できるような機会や場をつくっていかないと。

青山 鉄兵さん



文教大学人間科学部准教授。専門は社会教育・青少年教育。国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター副センター長・東京都生涯学習審議会委員・日本YMCA同盟常議員・東京YMCA長期キャンプ「野尻学荘」スタッフ

【青山さん】 若者特有の不安が解消されにくくなっているのは、先ほど挙げた雑談のような、「心の換気」とでも言うような気分転換ができる機会が大幅に減ってしまっていることが大きいのではないのでしょうか。若者たちが孤独な生活を余儀なくされ、ストレスが溜まっていき、それを発散させる機会が担保されていないのです。特に、こうしたストレス自体に自分で気付いていない若者たちほど「しんどさ」が見られるようにも感じます。

■ **見えないストレスを感じている子供たちの状況については、どう認識されていますか？**

【岩切さん】 例えば、未就学児の保育をされている先生方の話を伺うと、コロナ禍の状況にあってもアートなどの手法を取り入れたり、子供に対しフレキシブルに寄り添うなどの配慮をしたりと、子供たちの見えないストレスを意識しながらのきめ細かな対応がなされているように思います。その一方で、小学校以上に関しては、若干心配なところも感じています。例えば、教科学習の遅れへの対応などの点で、学習内容をこなすことに関心が行ってしまった結果、子供や保護者たちに必要以上の負荷をかけてしまっているというケースも見られます。保育の世界には、従来から「余白」を重視する視点が内在されていますが、それが教育という世界に入ると、子供たちの「心の換気」の重要性に対する認識が弱くなっているような気がしています。

【青山さん】 コロナ禍の1年で明らかになったのは、元来、学校教育の果たしてきた役割の中に、社会教育的な要素や福祉的要素がたくさんあったということです。学校の役割というと、ついつい教育課程を遂行することに関心が行ってしまいがちですが、



や雑談、給食はもちろん、家庭がしんどい状況にある子供にとっては、家庭から離れられるということ自体が持っていた価値など、教育課程の遂行とは異なる学校の価値を改めて評価していく必要があるように思います。こうした社会教育的価値や福祉的価値の提供という意味では、児童館等の放課後を支える施設の存在も重要ですね。全国の関係者の皆さんが、地域の中の遊び場やすき間を守っていくために、試行錯誤を続けています。

■ **コロナ禍の状況が子供や若者たちに与えている負荷の内実が少し見えてきたように思います。今、あまり重視されているとは言えないのですが、私たち社会教育関係者は子供や若者が持っている潜在的なニーズをどのように把握し、対応していったらよいのでしょうか？**

【岩切さん】

この国は、欧米諸国に比べて子供の声を聞くということに関する意識が弱いように感じま



す。特にコロナ禍の状況の下では、「大人が決めて、子供たちはそれに従って行動する。」というスタイルが定着してしまっているように感じています。このような状況だからこそ、当事者としての子供・若者の声に真摯に耳を傾けるということが重要になってくると思います。自分の感じていることを言語化できる年齢の子供・若者には、「対話」していく時間を確保することが大切だと考えます。また、未就学児や小学校の低学年の子供たちには、寄り添う姿勢で、行動や感情表現に細心の注意を払いながら「心の声に耳を傾ける。」ことがより一層求められると思います。

【青山さん】 子供の声を聞くためには、声を聞いてくれる大人や、お兄さんお姉さんの存

在が必要ですが、コロナ禍で様々な行動が制限されると、こうした「ナナメの関係」を築きにくいということが大きな課題です。世田谷区の



青少年交流センターでは、2回目の緊急事態宣言が発出される際、施設を利用している子供・若者に対して、施設の開館時間をどうしていくべきかについてのアンケートが行われました。そのアンケート結果を区の担当者にも共有した上で、緊急事態宣言中の開館時間等が決定されたわけです。最も希望が多かった従来通りの開館時間とはなりませんでしたが、このように子供・若者の声を反映する仕組みが担保されることは、シチズンシップ教育の点からもとても重要だと思えます。

【岩切さん】 それこそが社会教育だと思います。緊急事態になったから特別な取組が必要なのではなくて、日常生活の中でも必要なやり取りだと思うのです。当事者としての子供という側面を青少年施設の職員が重視しているからこそ、緊急時にそのような対応ができるのです。

■ コミュニケーションの在り方について、SNS等が子供たちに与えている影響をどのように考えますか？

【岩切さん】 私が子供たちとの関わりの中で感じているのは、子供たちの生活時間が分断されており、ちょっとした隙間の時間の中でゲームやSNSを楽しんでいるという状況のように思います。学校が終わって、塾に行ってお稽古事をしてというように、今の子供たちの生活時間には「余白」がありません。ライフワークバランスという言葉がありますが、子供にとってのスタディライフバランスも重要なのではないのでしょうか。子供にとって「まとまった時間（自由になれる時間）」をどう考えるか、に関心があります。「まと

まった時間」を子供たちに確保する中で、子供たちが主体的に遊びや学びを創るということが重要です。その手段としてSNSを利用することができれば、時間や空間を超えた新たなコミュニケーションが生まれるのではないのでしょうか。

【青山さん】 私は大学の授業の一環で、時計も含めたあらゆる電化製品を使わずに、ただ「本気で遊ぶ」ということをテーマにした5日間のキャンプのプログラムを行っています。スマホSNSもないシンプルで自由な共同生活の中で、一人一人が本気で遊んだ時に起こる化学反応を、自分自身で体験してみることが大切にしていますが、中には「何をしてもいい時間」を上手に使えない学生も見受けられます。それぞれの時間に他律的な目的や理由がないと落ち着かないのかもしれない。SNS等の影響は、子供・若者の側に自律性や主体性があるかどうかによって、大きく異なるように思います。主体的・自律的に利用できれば、SNSは重要なコミュニケーションツールになり得ると思います。

そうした面でも、学校外での体験活動などの中に、どこまで自由な時間や環境を用意できるかは重要な課題だと思います。青少年教育施設が学校と同じようにきっちりカリキュラムを組んでしまうと、子供たちをいつまでもプログラムの客体にしてしまい、創造性などが育まれる余地がなくなってしまうのではないのでしょうか。そもそも、青少年教育施設に来る子供たちは、多くの場合、施設で「教育されている」とは思っていないわけですから。



■ **最後に、青少年教育における体験活動の重要性について、コメントをお願いします。**

【岩切さん】 今、企業関係者たちが必死に取り組んでいるのは、仕事の中で意図的に「余白」の時間をつくり、その余白で社員一人一人が様々な創意工夫をどれだけできるかということなのです。企業の経営者たちと話していると、「余白」の時間を自分で主体的に埋め、新しいものを創造できる人とそれができない人の間で、大きな差が出てくるということをよく聞きます。実際の社会に出て求められるのは、自律的な意識をもった人間かどうかということです。重要なことは、幼少期からある程度の自由が担保され、子供たちが主体的に「これをやりたい。」「これをもっと深めたい。」という思いを持って体験活動を行うという原体験を持つことだと思います。子供たちは自由であればあるほど、いろいろなことに気付くアンテナが冴えてきます。大人が気付かないようなことも観察していたり、よくそんなことまで覚えているなと感心することもあります。子供たちは決して未熟な存在ではなく、大人が忘れてしまった感性をもち、多様なアンテナを持った存在であることを前提にした関わりこそが不可欠で、こういうコロナ禍の状況だからこそ、我々青少年教育、社会教育に関わる者たちがそのことの意味を広く伝えていかなければと考えています。

【青山さん】 岩切さんのおっしゃるように、子供の頃は、遊びと学びの境がなく、両者が融合していることが少なくありません。例えば、植物好きの子供が図鑑に見入っているとき、本人は勉強しているとは思っていません。でも、学年が上がるにつれて遊びと学びは全く別物になっていってしまうんですね。植物図鑑も理科の勉強の一環になってしまうと、途端につまらないものになってしまいます。School (学校) の語源はギリシャ語の schole(スコーレ)、「余暇」という意味なのですが、学問だって根っこには遊びがあります。学校でアクティブラーニングや探

究学習といった体験的な学習に取り組む際にも、遊びの要素を持って取り組めるかどうかによって学びのプロセスが大きく異なるものになるでしょうし、そのためには、幼少期からどのような体験をしてきたかが重要な意味を持つはずです。自由にさせてもらえた経験がないと、自由の良さもわからないし、創造性も育ちません。このような社会状況の中で、大人たちが工夫しながら、子供や若者たちが自由な時間を担保し、その中で主体性が発揮できる環境を醸成していくことの重要性を再認識する必要があるのではないのでしょうか。



■ **子供から大学生までの事例を含めて現状を伝えていただき、また、「心の換気」や「余白」などのキーワードにより、体験活動の意義や重要性について改めて考える機会となりました。本日は、ありがとうございました。**



※体験活動の写真は、「夢職人」からお借りしました。

認定特定非営利活動法人 夢職人 紹介

名称 認定特定非営利活動法人 夢職人

設立 平成 16 年 任意団体として設立
江東区のジュニアリーダー経験者の有志が中心
平成 20 年 特定非営利活動法人として活動を本格化
平成 30 年 東京都より認定を受ける。

目指していること

Vision：生まれ育つ環境に関わらず、心身ともに健やかに成長できる社会

Mission：子どもと若者の学びや育ちを社会全体で支える

事業 [実施回数：令和元年度]

・地域子供体験活動クラブ「キッズクラブ」(平成 16 年～)

小・中学生を対象に、多様な体験活動を実施
週末の日帰りを年間約 10 回、連休・長期休みに宿泊型のキャンプを年間約 10 回開催

・ユースボランティア (平成 16 年～)

10 代後半から若手社会人を中心としたボランティアの育成を目的として、団体の事業サポート、過疎地域での援農、災害復旧支援等

・ウェブメディア「Eduwell Journal」(平成 25 年～)

普及啓発活動として、教育や福祉の分野の実践家・専門家が記者となり、リアルな状況や専門的な知見を伝える。

・ネイチャーキッズ (平成 29 年～)

小・中学生を対象に、旅行会社や全国の NPO・企業等と連携した自然体験活動推進事業。
地方の自然体験等のコンテンツを生かし、年間約 20～30 回実施

・子供の食の支援「Table for Kids」(令和 2 年～)

経済的な事情を抱える親子に対し、地域の指定した飲食店と連携し、デジタル通貨を活用して食事を提供する。従来の子供食堂の開催が難しい中で、感染症対策としてデジタル化した「食」の支援として実施。



キッズクラブ



ユースボランティア

「子供・若者の体験活動」に役立つサイトの紹介

・文部科学省 体験活動推進特設ページ

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/mext_00935.html

「こどもの教育応援大使」香川照之氏による応援メッセージを発信するとともに、文部科学省の委託事業として実施する「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」等体験活動の様々な情報を発信し、青少年に対する体験活動の充実を推進

・文部科学省「青少年の体験活動の推進」

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/main4_a7.htm

・独立行政法人 国立青少年教育振興機構

<https://www.niye.go.jp/>

全国に 28 か所ある国立青少年教育施設の紹介や、青少年や指導者を対象とした事業、体験活動に関する情報の提供等

「青少年教育情報ポータル」として、青少年活動場所ガイド、調査研究報告書検索、教育事業プログラム検索等も掲載

